

永久保存（10-5）

兵庫県文化財調査報告 第71集

神戸市北区

籠谷古墳・宅原遺跡

中国自動車道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1990年3月

兵庫県教育委員会

神戸市北区

籠谷古墳・宅原遺跡

目 次

I はじめに	1
II 遺跡をとりまく環境	3
III 籠谷古墳	7
1. 立地	7
2. 遺構	9
3. 遺物	20
4. 小結	22
IV 宅原遺跡	25
1. これまでの調査	25
2. 立地と層序	25
3. 遺構	27
4. 遺物	27
5. 小結	28
V 考察	31
1. 籠谷古墳築造過程の復元	31
2. 北摂地域の後・終末期古墳	35
VI まとめ	40

挿図目次

fig. 1 遺跡の位置	iv
2 周辺の主要遺跡	2
3 籠谷古墳調査風景	6
4 籠谷古墳の位置	7
5 中国自動車道と調査区	7
6 墳丘測量図(調査前)	8
7 墳丘測量図(調査後)	10
8 墳丘検出状況	10
9 墳丘断面図	11
10 石室と列石平面図・立面図	14・15
11 側壁と天井石のずれ	16
12 石室実測図	17
13 銛出土位置及び木棺の復元	19
14 須恵器	20
15 鉄釘	21
16 宅原遺跡の位置と周辺の地形	24
17 調査範囲	25
18 平面図・断面図	26
19 出土遺物1	28
20 出土遺物2	29
21 籠谷古墳ロックダイヤグラム	30

fig.22	築造過程－第1段階・第2段階	31
23	築造過程－第3段階・第4段階	32
24	北摂地域の後・終末期古墳分布	36
tab.1	主要遺跡一覧表	3
2	鉄釘一覧表	22

図版目次

P L.	1	北神地区と六甲山
	2	龍谷古墳付近航空写真
	3	龍谷古墳遠景
	4	調査前
	5	表土除去後
	6	横穴式石室検出状態
	7	石室全景と石室埋土断面
	8	石室奥・側壁
	9	填土断面
	10	出土遺物
	11	宅原遺跡航空写真
	12	調査地点遠景と土層断面
	13	調査地全景
	14	出土遺物
	15	出土遺物
	16	出土遺物

例　　言

1. 本書は、中国縦貫自動車道の拡幅工事に伴い、兵庫県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて実施した、神戸市北区有野町二郎に所在する龍谷古墳と同長尾町宅原に所在する宅原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した測量成果は道路公団の設置した基準点から引照したもので、方位・座標は国土座標を、水準はT.P.を基準としている。
3. 調査は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が実施した。
4. 図版に使用した写真的うち、P L.1は神戸市教育委員会に、P L.2および11は日本道路公団にそれぞれ提供を受けた。
5. 本書の作製には山下史朗と山田清朝とがあたり、小川美奈が補助した。執筆分担は次のとおりである。山下 I、II、IV-1・2・3・5、V-2。山田III、IV-4、V-1、VI。



I は じ め に

調査に至る経緯

中国自動車道は、大阪府吹田市と山口県下関市とを結ぶ中国地方の大動脈として昭和58年に開通した。しかし近年の交通量の増加に加え、昭和63年の舞鶴自動車道の開通、山陽自動車道との接続が数年後に迫るなど、その拡幅工事が急務となっていた。そこで、日本道路公团では西宮北～神戸・三田インター間の路線を片側3車線に拡幅する工事を順次実施していく。

分布調査

この工事に先行して、兵庫県教育委員会では昭和62年12月1日に工事予定地区の分布調査を実施したところ、神戸市北区内の2地点で遺跡を確認したために、昭和63年度の事業として発掘調査を実施することになった。

遺跡の発見

分布調査の結果、神戸市北区有野町二郎では石材の露出した直径数mの古墳を発見し、地名を探って籠谷古墳と名付け調査対象地とした。また、その周辺の2地点で古墳状の隆起地形が認められたために合わせて確認調査を実施することとした。一方、神戸市北区長尾町では、土地区画整理事業に伴って神戸市教育委員会が調査を進めている宅原遺跡の一部が工事範囲に含まれることから調査をすることとした。

発掘調査

発掘調査は、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課の山下史朗と山田清朝とが担当し、籠谷地区の確認調査を昭和63年10月24日から開始した。調査結果により、古墳状の隆起地形については遺構・遺物ともに認められなかったために、ひきつづき籠谷古墳の調査に取りかかった。また、11月11日からは並行して宅原遺跡の調査に着手し、11月30日に全ての調査を完了した。

整理作業

出土した遺物は、平成元年度に新たに設立された兵庫県埋蔵文化財調査事務所において整理作業を実施し、調査報告書を作製した。本年度の整理作業には山下・山田と当事務所嘱託員の小川美奈、平林育子、本庭英子、斎藤海子があたり、出土遺物の水洗い・ネーミング・接合・復元・実測・製図・写真撮影、遺構図の製図、編集作業を実施した。

現地調査と整理作業にあたっては、日本道路公团三田工事事務所、同神戸工事事務所、神戸市教育委員会に協力をいただいたほか、井守徳男・高島信之・高島知恵子・安田滋の各氏に御教示をいただいた。



II 遺跡をとりまく環境

地理的環境

籠谷古墳・宅原遺跡の所在する神戸市北区及び三田市域は、近年北摂・北神ニュータウンの建設により急激に開発が進み、人口増加の著しい地域である。

神戸市街地から六甲山系を超えた内陸部にある当地域を一般に三田盆地と呼んでいる。この三田盆地は、北部の丹波山系に源を発する武庫川により形成された低地が、六甲山系の隆起により遮断されたためにできた盆地である。盆地北部は凹凸の激しい山地となっているが、南部は神戸層群を主体とする低丘陵地が河川の浸食をうけてゆるやかな起伏をみせている。武庫川は、三田盆地の東部で有馬川・有野川・八多川・長尾川などの流れを集め、峡谷となって流下する。籠谷古墳はこれらのうちの有野川沿いの段丘斜面に位置し、宅原遺跡は長尾川流域に開けた低地と丘陵・段丘上に広がっている。

tab.1 主要遺跡一覧表

1 篠谷古墳	17 宅原遺跡	33 川除古墳群
2 オキダ古墳群	18 桑原遺跡	34 大原古墳群
3 青石古墳	19 対中遺跡	35 福島古墳群
4 稲荷神社裏山古墳群	20 三輪宮ノ越遺跡	36 福島長町遺跡
5 平田遺跡	21 古城遺跡	37 青竜寺裏山古墳群
6 塩田遺跡	22 天神遺跡	38 加茂古墳群
7 尼崎学園内古墳群	23 下深田大山遺跡	39 加茂六地蔵遺跡
8 中野古墳群	24 下深田遺跡	40 内神古墳群
9 銃射山石劍出土地	25 貴志遺跡	41 溝口遺跡
10 下田中古墳群	26 下所遺跡	42 宮脇古墳群
11 八幡神社裏山古墳群	27 奈カリ与遺跡	43 宋野古墳群
12 川北古墳群	28 貴志古墳群	44 宋窯跡群
13 八景中学校南古墳群	29 奈良山古墳群	45 東仲古墳
14 墓山古墳	30 西山古墳群	46 志手原古墳群
15 日下部古墳群	31 中西山遺跡	47 有馬富士東麓古墳群
16 定塚古墳群	32 川除・藤の木遺跡	48 清水山古墳群

歴史的環境

三田盆地周辺は、ほぼ古代律令制下の有馬郡にあたり、摂津国に属する。やや無理があるよう思えるが、近年北摂地域と呼ぶのはこのためである。

従来、当地域では弥生時代以前の遺跡はほとんど知られていなかったのだが、近年の開発ラッシュは遺跡の分布状況をも一変させている。

旧石器時代では、三田市溝口遺跡が本格的に発掘調査された唯一の遺跡で、ナイフ形石器などが出土している。このほか三田市域では末西遺跡、木器遺跡で有舌尖頭器が出土しているのが目立った存在であるが、やや視野を広げれば、舞鶴自動車道建設に伴い発掘調査が実施された春日町七日市、西紀町板井寺ヶ谷遺跡など大規模な遺跡の発見が相次ぐなど注目される地域である。縄文時代の遺跡については、各地に散見できるが、いまのところまとまって調査された遺跡はない。

さて、近年の北摂地域の発掘調査で最も注目できるのは弥生時代の集落遺跡であろう。その一つは武庫川右岸の丘陵部での遺跡の発見である。北摂ニュータウンの開発に伴って、奈カリ与遺跡、平方遺跡、中西山遺跡などの遺跡が相次いで調査され、弥生時代中期後半（IV期）の集落遺跡があたり一帯に存在することが判明している。また、北神No.4地点遺跡でも、中期末～後期初頭の住居跡が数棟確認されている。

もう1つは、低地部での遺跡の発見である。武庫川の河川改修で調査された川除・藤の木遺跡、JR福知山線複線化に伴って調査された桑原遺跡などが挙げられる。川除・藤の木遺跡は、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての集落遺跡で、竪穴住居が計57棟みつかっており、当地では中心的な集落のひとつであろう。桑原遺跡でも同様の時期の住居跡が確認されている。これらの遺跡は、従来遺跡の存在がまったく知られていなかった河川流域の低地部に立地しているが、詳細に分析すると自然堤防状微高地に存在していることが明らかとなっている。これら高地と低地の集落遺跡はその年代と立地の面で明らかな対比を示しており、注目されている。このほか三田盆地の弥生時代の遺跡については、『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書II』、『天神遺跡』に詳細な紹介があるので参考にしていただきたい。

古墳時代の遺跡については、三輪宮ノ越遺跡、下深田遺跡、下所遺跡などで後期の遺構がみつかっているが、まだまだその緒についたばかりである。したがって、古墳時代の様相を知るには古墳が中心になる。当地では前期の古墳についてはいまだその存在ですらほとんど明らかになっておらず、後期の古墳が中心になっている。その概要是、三田市域については『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書I』に、神戸市域については『神戸市史』に詳しく述べられているが、武庫川左岸では横穴式石室を主体とする古墳群が優勢で、右岸部では木棺直葬墳が主体となる傾向があって、各氏族の出自の違いに結びつけて考えられている。これについては後に詳述する。

歴史時代の遺跡については、最近特に調査例がふえているが、多岐にわたるためここではその主なものに限ってふれておくことにする。

三田市屋敷町の金心寺廃寺は、塔心礎が現存し、白鳳期の瓦が出土することで著名であるが、その実体は明らかでない。しかし、古代において有馬郡の中心、すなわち郡衙の所在地の有力な候補地となっている。

当地の歴史時代を特徴付ける遺跡に、須恵器の窯跡がある。三田市北部の末、木器、相野の地区にまとまった窯跡群が分布している。そのうち最も古いものが末の郡塚1号窯で、5世紀末のものである。この末窯跡群は奈良時代から平安時代の初頭にかけて最盛期をむかえ、平安時代半ばには衰退していく。これに対し、木器窯跡群は9世紀前半に集中し、相野窯跡群は10~11世紀にかけて操業されていることが明らかとなっている。なお、相野窯跡群から鉢をひとつ超えたところが日本六古窯のひとつとして著名な丹波立杭窯で、13世紀に陶器の生産を開始していることが判明しているが、三田市域の窯跡との系譜は今のところ明らかでない。

参考文献

- 青木哲哉 1983 「三田盆地およびその周辺地域の地形」『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書II』兵庫県教育委員会
高橋 学 1988 「三田盆地の地形環境分析I」「対中遺跡」兵庫県教育委員会
神戸市 1989 「新修神戸市史」
三田市教育委員会 1983 「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書I」
兵庫県教育委員会 1983 「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書II」
兵庫県教育委員会 1986 「桑原遺跡」
兵庫県教育委員会 1987 「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)」
兵庫県教育委員会 1987 「墓山古墳」
三田市教育委員会 1987 「天神遺跡」
神戸市教育委員会 1987 「オキグ古墳」
妙見山麓遺跡調査会 1988 「宅原遺跡」
兵庫県教育委員会 1988 「対中遺跡」



III 篠谷古墳の調査

1. 立地と現状

立地 篠谷古墳は、武庫川の中流域、つまり三田盆地南端部において武庫川と合流する長尾川の支流をなす有野川と八多川に挟まれた南北にのびる丘陵斜面に立地する。より具体的には丘陵斜面でも、東側の有野川によって形成された小規模な谷底平野を望む東側斜面中腹に立地している。長尾川との合流点から約2.5km南にあたる。さらに、調査前の地形測量の成果（fig.6）を参考にこの斜面をより微視的に観察すると、丘陵斜面でもわずかに谷状を呈する地形上に立地していることがわかる。

墳丘中央部での標高は202mで、丘陵斜面の傾斜角は約22°である。

現状 篠谷古墳の立地する丘陵斜面は雜木林となっている。また、約10m程東側を中心



fig.4 篠谷古墳の位置

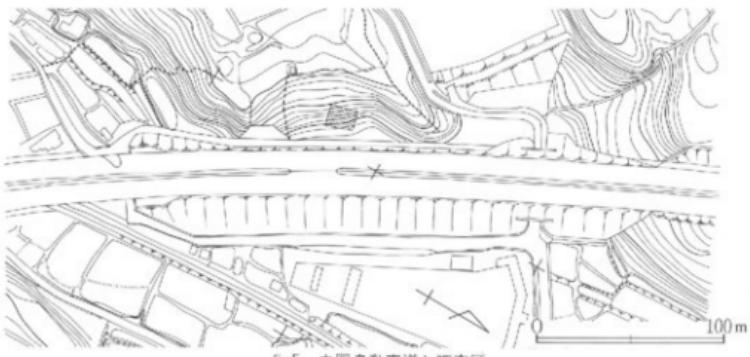


fig.5 中国自動車道と調査区

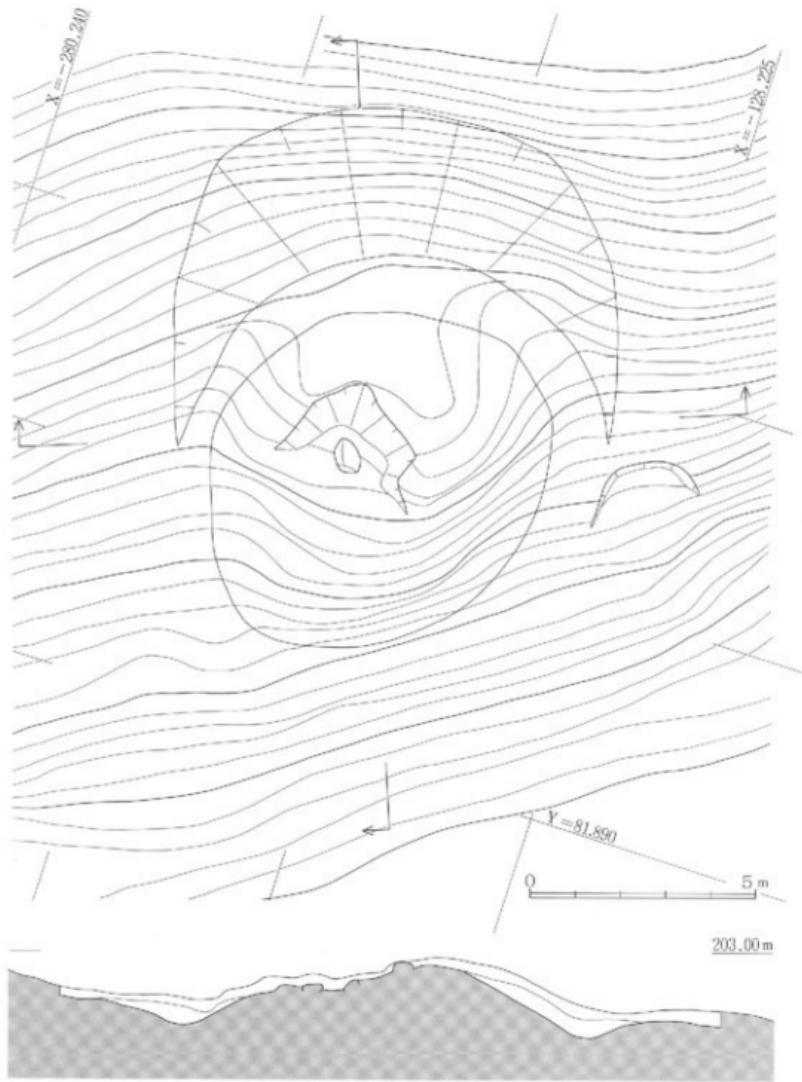
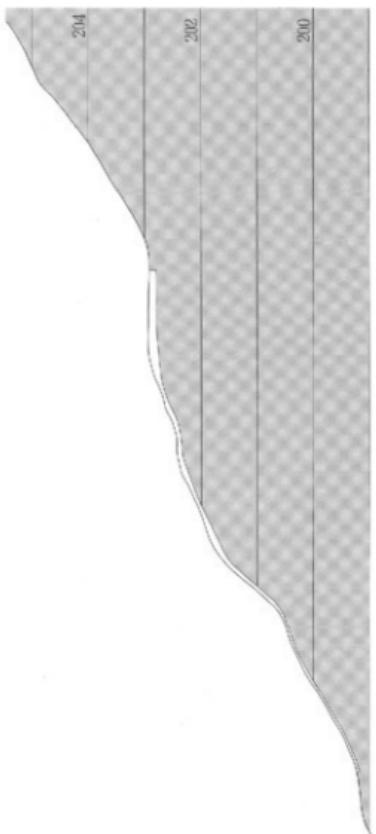


fig.6 填丘測量図（調査前）



国自動車道が走っている。当古墳は、今まで周知されていなかったものであるが、墳丘および墳丘西側（斜面上方）のカット部が明瞭で、容易に古墳と認識できるものであった。また、墳丘頂部においては、天井石1石が露出しており、内部主体が横穴式石室と判断できるものであった。

2. 遺構

調査範囲が限られ、墳丘西側の一部と、その西側の周溝およびカット部については調査できなかった。しかし、墳丘自体は、比較的良好な残存状況を示すもので、古墳の築造方法を理解する上で多くの示唆を与えてくれるものであった。

墳丘 墳丘の山側斜面をカットし、その土を盛ることによって墳丘が構築されている。石室の天井石及び側壁の一部が若干崩れていたものの、墳丘そのものは築造当初の形状・規模に近いものと考えられる。

カット面は、調査範囲外にあたり調査できなかったが、調査前の地形測量の成果に基づくと、墳丘主軸ライン上で3m（水平長）を測り、カット面上端と周溝底との比高は約2mと推定される。

墳丘は石室の主軸方向にやや長い梢円形を呈し、長軸方向で8.8m、その直交方向で7.5mを測る。また、その長軸ライン上で入口側の墳裾と墳頂部との比高差は2.1mを測り、墳丘主軸ライン上で谷側との比高は2.6mに及ぶ。

調査の最後に実施した墳丘の断ち割り調査によると、墳丘は山側斜面をカットした土を盛り、その後、盛土の流失を防ぐために粘質土を盛って固めるという作業を繰り返すといったいわゆる版築に近い方法で構築されていることが明らかとなった。この具体的な過程については章を

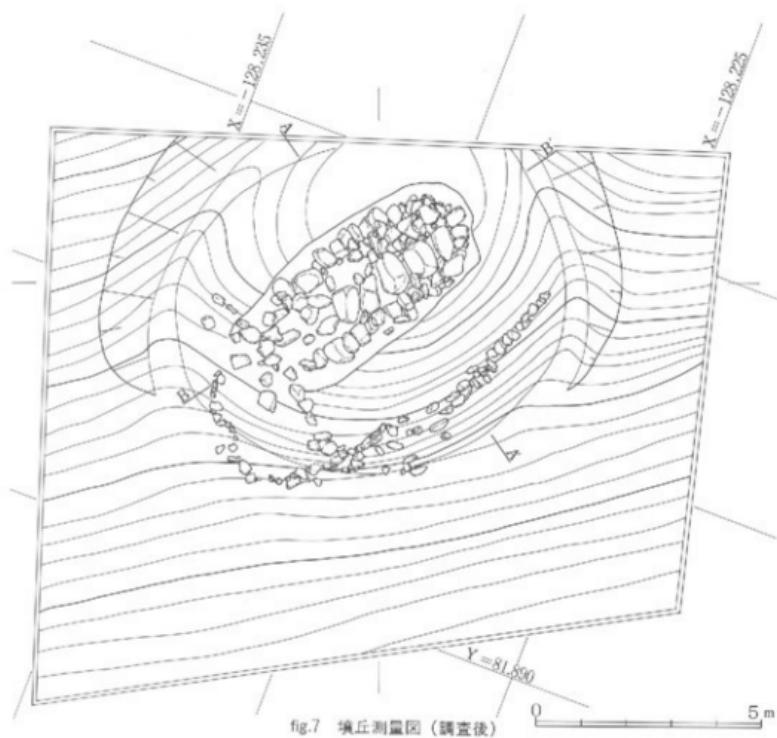


fig.7 填丘測量図（調査後）



fig.8 填丘検出状況

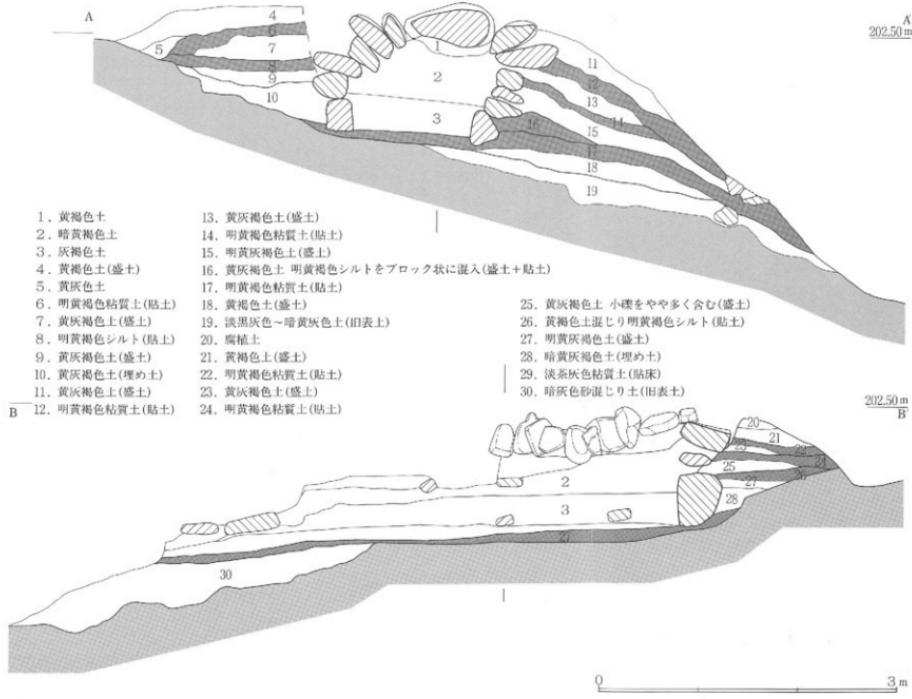


fig.9 塙丘断面図

改めて検討する予定である。

周溝 本来は墳丘の山側を弧状にめぐらされていたものと推定されるが、調査範囲が限られたため、検出できたのは全体の約2/3である。底部における幅はほぼ一定しており、約40~50cmを測る。墳丘主軸直交ライン上における、南側および北側斜面からの掘り込みの深さはそれぞれ約40~70cmを測る。

列石 墳丘の谷側斜面で確認され、山側では認められなかった。検出した列石は全長約7.3mに及び、平面的にみるとほぼ直線的である。また、側面からの観察では、墳丘北側斜面から南側にかけてほぼ直線的ではあるが、水平ではなく約10°傾斜している。列石は、30cm×10cm程の偏平気味の亜角礫が用いられ、ほぼ全体が墳丘内に埋め込まれており、わずかに谷側に石の面が揃えられ、露出していた。また、列石の大半は1段のみであったが、一部2~3段に積まれている箇所も認められた。さらに、列石の上側・下側にも偏平気味の石が墳丘表面に貼られていたが、墳丘谷側の斜面において大量の同規模の礫が認められたことも考慮に入れると、本来墳丘全体に貼石がなされていたものと推定され、これらの石はその名残りと考えられる。ただし、山側周溝内ではほとんど認められなかったことから、谷側のみになされていたようである。

なお、墳丘の断ち割り調査において、これらの列石のレベルは石室床面のレベルとほぼ一致することが明らかとなった。後述する(V-1)ように、床面成形の際に盛土を補強する意味で列石が施されたものと考えられる。そして、貼石についても同様の機能を考えられる。また、列石のレベルが南側に向かって傾斜していたことについては、南側ほど墳丘自体の盛土の占める割合が高くなっていることから、石室等の重みによる沈み込みがそれに比例して大きかったことによるものと考えられる。

主体部 無袖式の横穴式石室である。主軸方向は斜面の等高線とほぼ平行し、N54°Eを指向する。開口方向は南東方向である。この開口方向については、おそらく南側を意識したものと考えられるが、地形的な制約からこのような方向となったものと想定される。

石室の石材は、すべて亜円形の河原石を用いている点がこの石室の特徴である。この石は、花崗岩からなり、当古墳のすぐ東側を流れる有野川からもたらされたものと考えられる。

石室は山側斜面のカットによる土を盛って造成された平坦面上に構築されおり、いわゆる地山を掘り込む墓壙は掘られていない。この石室基盤の軟弱さのため、天井石まで残存していたものの、側壁の中段以上は斜面下方に崩れかかり、天井石は石室内に落ち込んだ状況であった。また、側壁中段以下においても、上部の崩壊に伴って全体的に東側に崩れた傾向にあり、当初の状態が保たれているのは、基底石のみである。ただし、人為的な破壊はなかったため、当

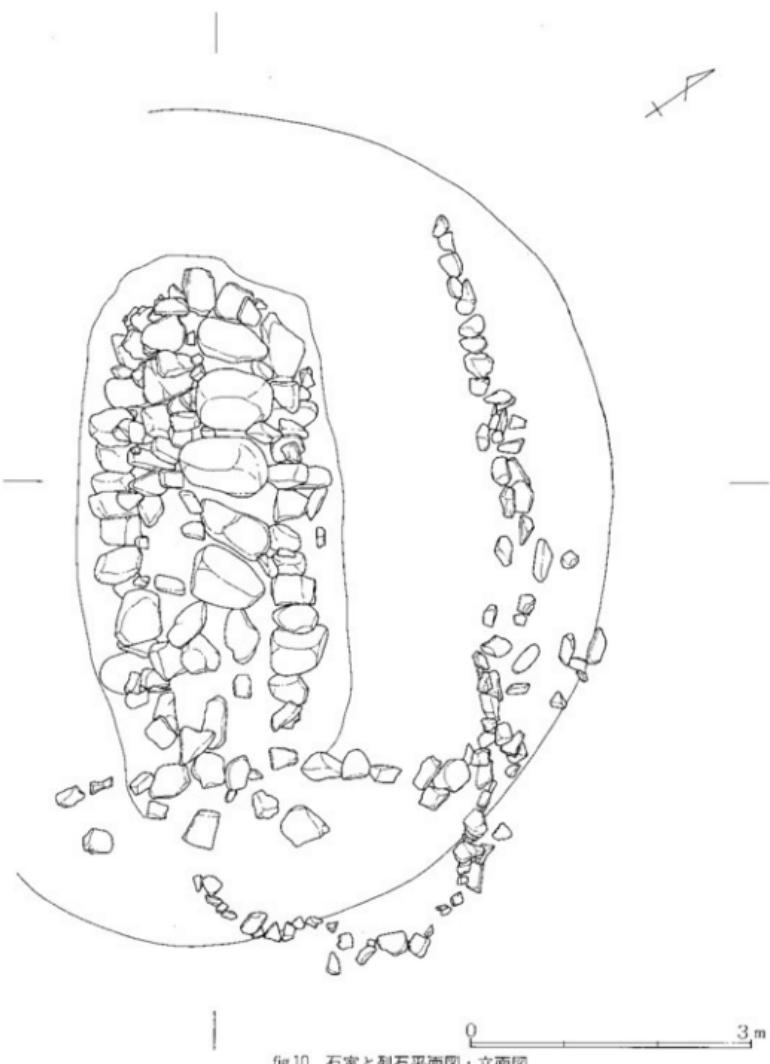
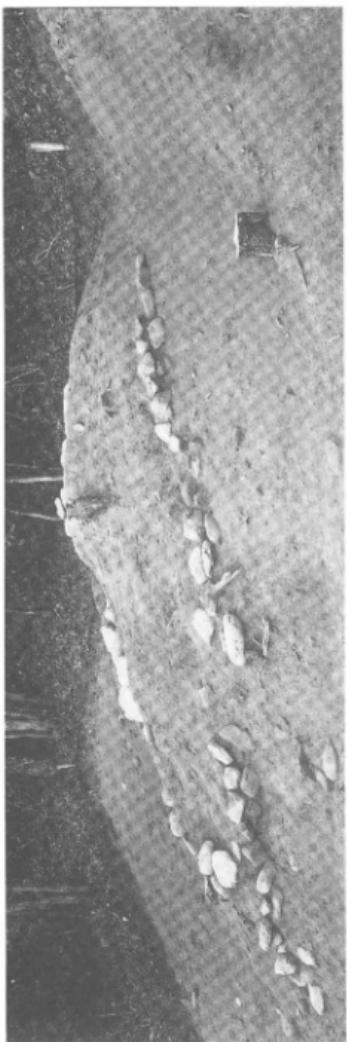
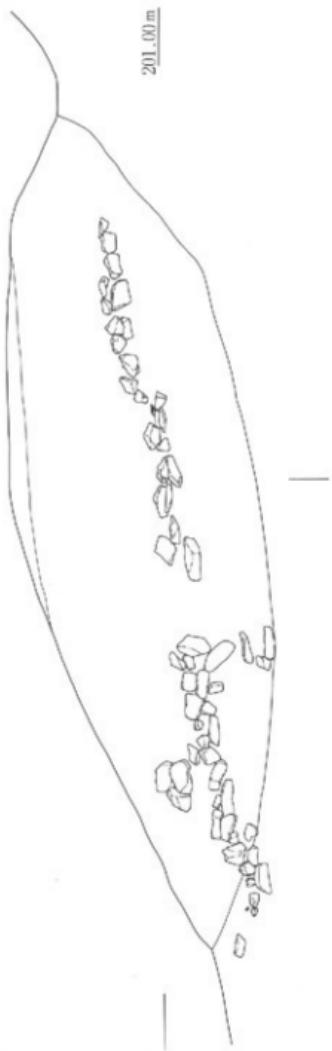


fig.10 石室と石塔平面図・立面図



の石室の規模を復元することはある程度可能である。また、石室内は大きく2層に分けることができ、下層は石室内に流入した層（黄灰褐色土）、上層は石室崩壊時に落ち込んだ層（黄褐色土）からなる。

石室の平面形はほぼ長方形を呈するが、中央よりやや奥側で膨らむ傾向にある。特に右側壁側がより顕著である。主軸ライン上で4.85m、その直交方向の最大部で1.2mを測る。また、奥壁側の幅は0.95m、入口部の幅は1.1mである。なお、床面のレベルは一定ではなく、石室の東側及び入口側は約10cmほど落ち込んでいる。

奥壁は、幅70cm、高さ50cmの大きな鏡石の上に3段に石が積まれている。

側壁は、右側壁で3.9m、左側壁で4.8mを検出した。両側壁とも5ないし6段に積まれており、床面からの高さはそれぞれ最高で0.85m、1.2mである。基底部は約60×30cm大の石を用い、それより上段の石は基底石より小さな石を積んでいる。やや不整形な石もあるが、基本的に横長に据えられている。また、入口付近において石の並べかたを変え、狭道を意識するようすは認められない。なお、左側壁については基底石を除いて石の積み方が不揃いのようであるが、これは、谷側に側壁自体が崩れかかったことによるものと考えられ、当初は右側壁のようにある程度整っていたものと考えられる。奥壁・側壁とも面を揃える意識は認められるが、河原石を使用しているため整っているとはいがたい。

天井石は90×50cm前後の梢円形気味の石が用いられている。調査で確認できたのは5石であるが、石室の大きさから考えると、あと2ないし3石は用いられていたものと推定される。また、天井石の最大幅が90cm前後であるのに対して、前述したように床面の幅が1.1～1.2mであることから、側壁はある程度の持ち送りがなされていたものと推定される。このことは、石室内を半蔵した際の断面の観察において、側壁の倒壊状況からも確認することができた。さらに、側壁と奥壁との境においても、上部の石ほど角をとるように積む傾向が認められ、ここにも石

室の構築において持ち送る意識が認められる。

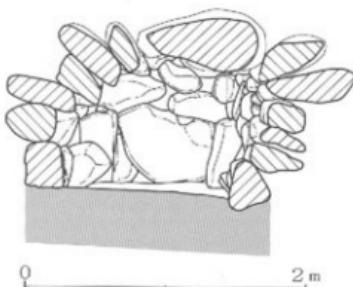


fig.11 側壁と天井石のずれ

木棺 石室内に鉄釘の分布が認められた。これらは棺材の結合に用いられたと考えられ、被葬者は木棺に納められていたと推定される。鉄釘は、石室内の中央部から奥壁側にかけて出土している。これらの釘の水平・垂直分布をみると平面的には200×80cmの長方形の範囲内に、立面上には高さ約15cmの平行四辺形を呈

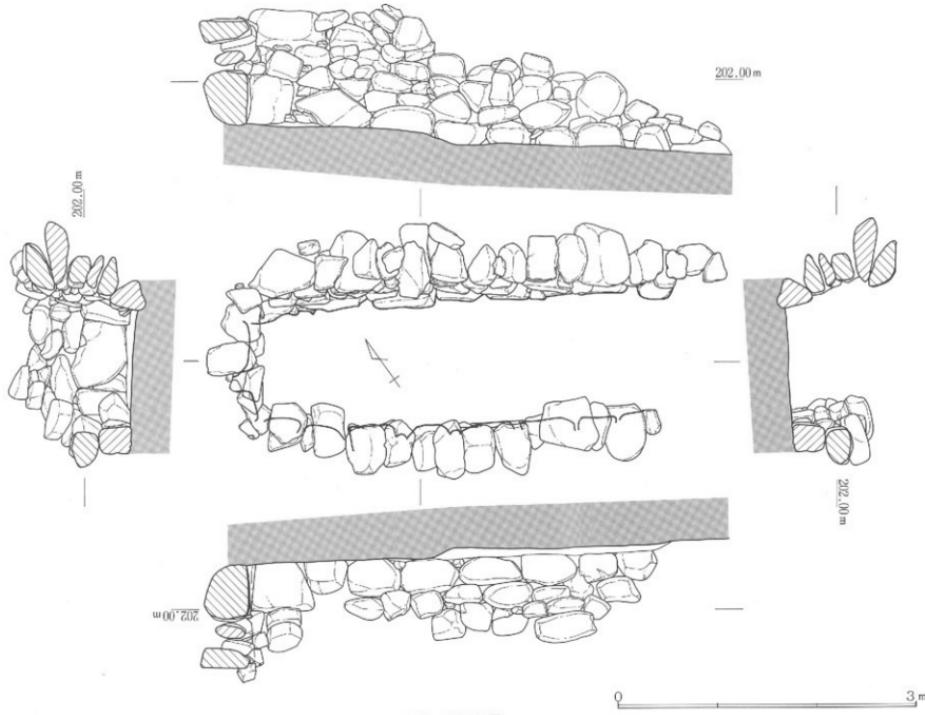


fig.12 石室实测图

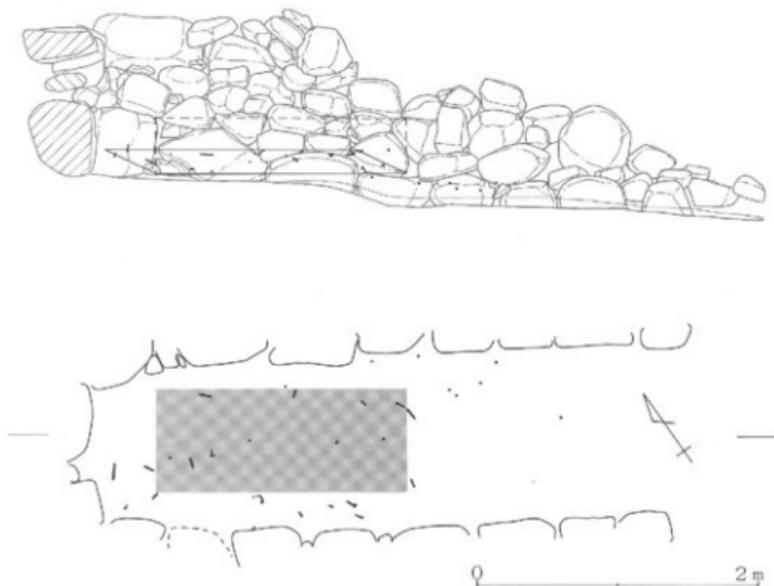


fig.13 釘出土位置及び木棺の復元

する範囲内に分布が限られている。このような分布状況から判断すると木棺は人為的に破壊されたのではなく、天井石が落ち込んだ際の土圧によって、木棺が奥壁にむかって押し潰された様子を物語るものと理解できる。そして、この状況から元の棺の規模を復元すると、長さ180cm、幅80cm、深さ40cmとなる。また、復元される木棺は、石室の主軸ライン上に主軸方向を一致させていることから、単独で納められていたものと考えられる。

ところで、次頁で述べるように、個々の釘を観察してみると、木質痕が残存しており中には木質痕の方向を違えているものが認められる。この方向を違える木質痕のうち、頭部側の木質痕の幅は棺材の厚みに相当するものと考えられる。これにもとづくと、当古墳に用いられた棺材の厚みは約1.2cmと推定される。

3. 遺物

出土した遺物は須恵器 3 個体と釘約47本である。

須恵器 3 個体とも石室入口部で出土したものである。いずれも、崩れた天井石ないし側壁の下からの出土である。盗掘の際に搔き出されたものと考えられる。

1 は、口径9.7cm、器高3.6cmを測る壺である。器高指数は37である。底部から体部にかけては比較的緩やかに屈曲し、斜上方向に直線的に延びる。体部内外面および底部内面は回転ナデ、底部から体部にかけての屈曲部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。底部はヘラ切り未調整で、笠起こしにより切り離されている。また、底部外面には火漆痕が認められる。

2 は、口径8.8cm、器高3.6cmを測る壺である。器高指数は41である。1 と比べて、底部から体部にかけての屈曲が明確であるのが大きな特徴である。調整方法は1 と同様で、底部内面および体部内外面は回転ナデ、底部から体部にかけての屈曲部は回転笠削りにより仕上げられている。また、底部はヘラ切り未調整で、切離しも笠起こしによっている。

3 は、壺部の約1/6が残存する高壺である。壺部全体の重みは著しいが、口径10.3cm、壺部の器高約3.7cmを測る。調整方法は、1・2 の壺と同様、壺部内面および体部内外面を回転ナデ、底部から体部への変換部を回転笠削りによって仕上げられている。また、壺部と脚部との接合部は回転ナデによって仕上げられている。

鉄釘 先述したように、石室内に埋葬された木棺に打ち込まれていたと考えられる釘である。いずれも断面方形の和釘である。計約47本出土している。これらの釘は完形で出土しているものはわずかであるため、大まかな傾向としてしか捉えられないが、長さの点において全長約10cm前後のものと約5cm前後のものとに大きく2つにわけることができる。ただし、頭部の形態は、全て頭部を薄く叩き延ばしL字形に屈曲させるもので、田中彩太氏の分類⁴におけるA類に相当するものである。

全ての釘についてではないが、大半の釘において木質痕が少なからず認められる。これら木質痕の付着状況から数タイプに分類が可能と考えられるが、正面・側面とも全体的に依存している例が少ないため、明確にすることはできない。なお、各釘の計測値は以下の通りである。

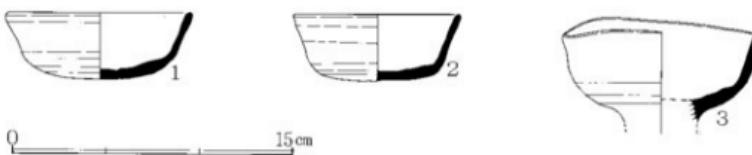


fig.14 須恵器

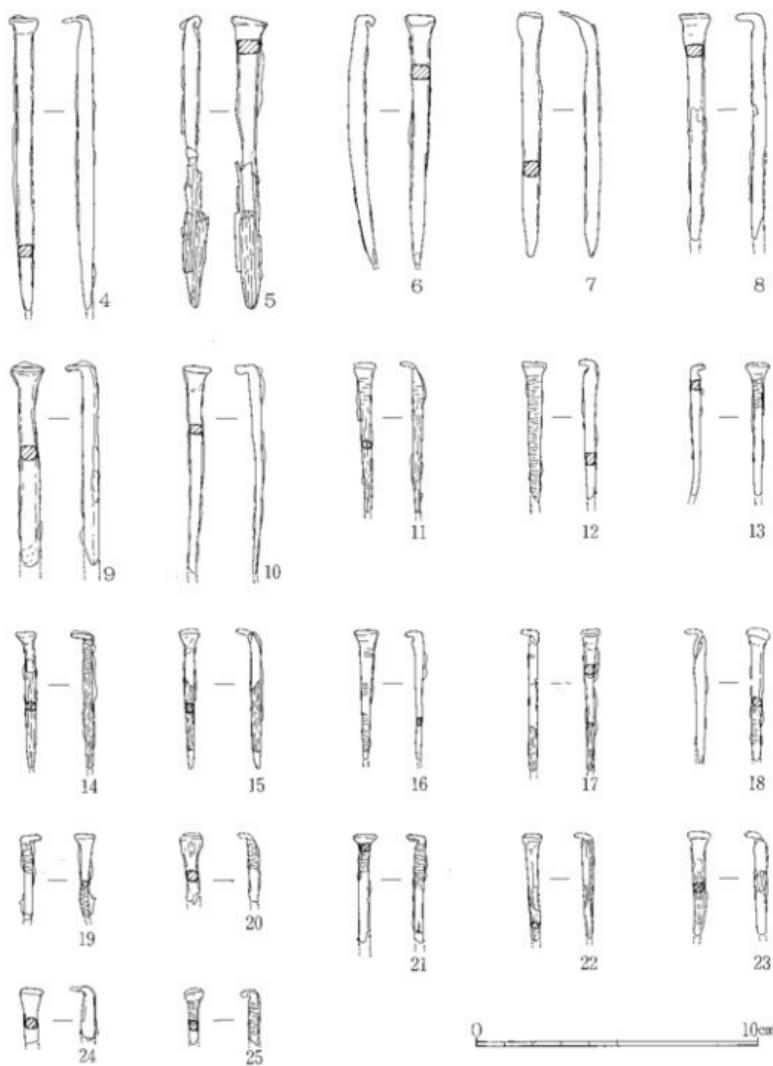


fig.15 鐵釘

tab.2 鉄釘一覧表

No	長さ (cm)	断面 (cm×cm)	木質痕		No	長さ (cm)	断面 (cm×cm)	木質痕	
			正面	側面				正面	側面
4	(10.5)	0.5×0.4	+	+	15	4.8	0.3×0.3	+縦	+縦
5	10.5	0.8×0.5	+縦	+縦	16	(4.5)	0.3×0.1	横+	横+
6	(9.0)	0.7×0.5	+	+	17	(4.8)	0.4×0.3	+縦	+縦
7	8.6	0.6×0.6	+	+	18	(4.4)	0.4×0.3	+横	+
8	(8.0)	0.4×0.2	+	+	19	(3.1)	0.2×0.2	+横	横+
9	(7.3)	0.5×0.4	+	+	20	(2.2)	0.4×0.3	+	横+
10	(7.5)	0.5×0.3	-	+	21	(3.8)	0.3×0.2	横+	横+縦
11	(5.1)	0.4×0.2	横+縦	横+縦	22	(3.5)	0.3×0.2	横+縦	+
12	(5.0)	0.5×0.4	横+横	+	23	(3.5)	0.3×0.5	+縦	+縦
13	(4.7)	0.4×0.3	横+	+	24	(2.0)	0.4×0.3	+	+
14	(4.8)	0.3×0.3	+縦	横+縦	25	(1.7)	0.3×0.3	横+	横+

4. 小 結

墳丘そのものの残存状況は、当初の墳丘規模の復元が可能なほど比較的良好であったが、石室内の遺物は木棺に使用された釘以外は皆無で、わずかに石室内入口付近で須恵器が3個体出土したにとどまる。このため、被葬者など当古墳の歴史的位置付けを行うにあたっての材料は不十分であるが、以下若干の検討を加えていきたい。

まず当古墳の年代について検討していくことにする。古墳の年代については、3個体の須恵器から考察せざるをえない。これら3個体の須恵器は壺と高壺からなるが、その特徴から同時期のものと考えられる。特に底部がへら切り未調整であること、底部から体部にかけての屈曲部にヘラ削り調整が施されていること、口径が10cm前後であることが、壺の特徴として指摘できる。これらの壺の特徴、特に壺の口径が10cm未満であるという特徴を中心に菱田氏の隼上窯出土資料をもとにした編年案²にあてはめると、第III段階に相当すると考えられる。

ところで、これらの須恵器が示す時期は、初葬に伴うものなのか、追葬に伴うのかの理解のしかたで、当古墳の年代の捉えかたも大きくかわってくる。しかし、追葬が行われたことを示

す状況は全く認められなかつたこと、石室が比較的小規模であること、木棺に使用された鉄釘の分布状況から1棺分と考えられ、その木棺の現位置が保たれていたことなどの理由から、単次葬と考えたい。したがつて、須恵器の示す年代を当古墳の築造年代をほぼ示すものと考えたい。具体的には、菱田編年を採用して7世紀前半と考えたい。

次に墳丘の構築方法の検討をおこなつてみたい。まず、墳丘についてであるが、後述するよろ、版築に近い工法をもつて盛土をおこなつており、築造技術における先進性が認められる。その一方、石室に用いられた石材は、より近くで採集できる有野川の河原石である。当古墳の立地する地域一帯は、一般の古墳に使用されるような切石の採集は困難であり、供給力の弱さが感じられる。したがつて、当古墳の被葬者の力のおよぶ範囲は、古墳の東側に展開する有野川流域であることは間違いないが、かなり限られていたものと想定される。なお、墳丘の構築法にみられる先進性と石材供給力の弱さとの矛盾点については、石材が良好でないために、それを補うために版築的工法を用い、丁寧に構築していったとも考えられるが、その当否については判断できない。

最後に、当古墳の地域的位置付けについて述べておきたい。籠谷古墳が意識されたと考えられる有野川を中心とした平野部において、当該期を含めた遺跡はほとんど周知されていない。わずかに平成元年度の調査において、下二郎遺跡で6世紀中頃の土壙墓が確認されている³だけである。また、有野川を挟んだ向かい側丘陵に二郎古墳群が知られている⁴。したがつて、籠谷古墳と関連すると考えられる同時期の遺跡は不明であり、その存立基盤等を明確にすることはできない。今後の成果をまちたい。

注1. 田中彩太「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」『考古学研究』第25巻2号 1978年

2. 菱田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』69巻3号 1986年

3. 神戸市教育委員会文化財課学芸員山本雅和氏の御教示による。

4. 新修神戸市史編集委員会「神戸市遺跡分布図」「新修 神戸市史 歴史編I 自然・考古 付図」 1989年



図36 宅原遺跡の位置と周辺の地形

IV 宅原遺跡

1. 既往の調査

宅原遺跡は、神戸市北区長尾町宅原一帯に所在する、縄文時代から近世にわたる複合遺跡群の総称で、16の地区に分かれている。

この宅原遺跡では、昭和55年の北神ニュータウン建設に伴う平池坂谷地区の調査以来、神戸市教育委員会が中心になって、昭和58年度から始まった区画整理事業や道路建設・河川改修工事に伴って発掘調査が継続的に実施してきた。

これまでの発掘調査では、内垣地区で弥生時代後期の住居跡が見つかっているほか、辻垣内・有井・宮ノ元・豊浦の各地区で古墳時代中～後期の遺構・遺物が出土しているが、宅原遺跡を最も特徴づけているのは律令期の遺物であろう。腎下地区では「評」の墨書き土器が、宮ノ元地区では日本最古の木製面が出土している。

今回の調査地は豊浦地区にあたっており、隣接地の調査では、郷里制の編成単位を示す「五十戸口」の墨書き土器が出土しており、評・郡衙や里家・郷家といった地方官衙が存在していた可能性が考えられている。

2. 立地と層序

遺跡の所在する神戸市北区長尾町付近は、神戸層群を基盤とする低丘陵の発達した地域で、武庫川の支流である長尾川が開削した谷の南側には段丘地形が発達している。宅原遺跡豊浦地区は、これらの丘陵から舌状に伸びた段丘上に立地している。さらに細かい目でみれば、この段丘はいくつかの小谷により分断されており、調査地点はこの最も南端の谷の奥まった部分に位置している。

調査地点は、現状では西側から東側に向けて下がる階段状の畑・水田が営まれている。標高



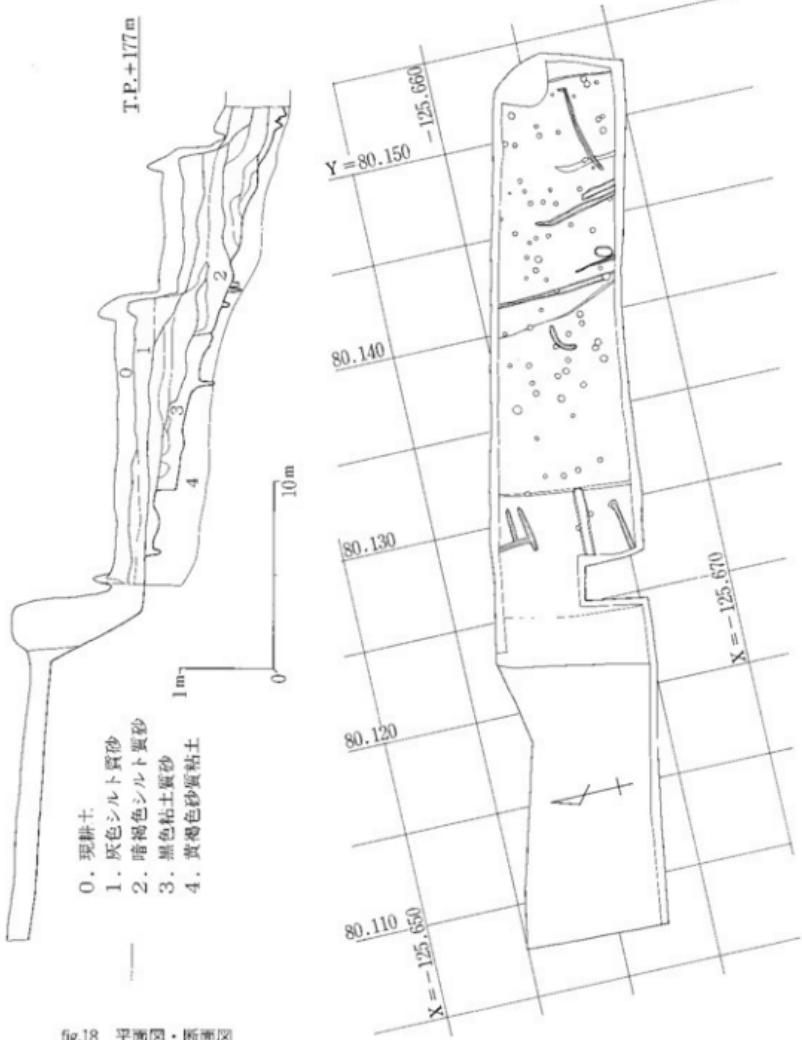


fig.18 平面図・断面図

は最も西側の畠で178.2m、最も東側の水田面で176.1mである。

このうち、西側およそ3分の1は丘陵を削って畠が作られているが、東側では地山（4層）は6%の傾斜を持ち、4段に整形されて遺構面を形成している。この上を暗褐色の遺物包含層（2層）が覆い、斜面下方に向かって徐々に厚みを増している。部分的に古い黒色の遺物包含層（3層）も認められる。さらにその上部には中世以降のものと考えられる旧耕土（1層）が存在している。

3. 遺構

調査地では、地山は4段に整形され、遺構面を形成している。この段整形はほぼ正方位を向いているが、斜面の傾斜の直交方向すなわち等高線の方向ともほぼ一致しているために、広範な土地区画に一致するものかどうかは判断できない。

この遺構面から柱穴と溝が検出された。柱穴は68箇所検出され、直径20~35cm程度の大きさで、深さは10~30cmとあまり大きなものではない。これらの柱穴は掘立柱建物に伴うものと考えられ、埋土は黒っぽいものと灰色のものとに分かれ、時期差を示すものと考えられるが、建物を復元するには到らなかった。

溝は、先の地山の整形に伴いほぼ正方位を向くものと、直交方向を向くものとが存在する。検出面での幅は30cm前後、深さは10cm前後である。これらの溝は掘立柱建物に伴う雨落ち溝あるいは平坦面を保護する排水溝と考えられるが、先の柱穴の状態と併せて判断すると、これらの掘立柱建物跡は等高線方向を主軸とした南北に長い建物であったようである。

出土遺物の年代観からすると、遺構の時期は奈良時代前後と平安時代末前後の2時期が想定できそうである。このことは、周辺部の調査成果とも一致している。

4. 遺物

当遺跡出土遺物は、すべて土器である。これら土器の大半は包含層出土のもので、遺構にともなう遺物は極わずかで、しかも小片での出土である。したがって、ここでの出土遺物についての報告の対象は包含層出土のものに限られる。

出土土器は、時期的には大きく奈良時代後半から平安時代前半にかけての遺物と、平安時代後半から鎌倉時代にかけてのものとに分類できる。

まず、前者に分類される土器であるが全て須恵器である。器種としては、壺A（26・27）、壺B（29・30）、壺B蓋（28）、長頸壺（31）が認められる。壺Aは、底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がりさせている。壺Bは、29に関する限り、高台が底部から体部にかけての変換部に付き、体部は内輪気味に立ち上がる。深い椀形を呈し、器高指数は44である。長頸壺は底部のみの残存であるが、断面方形の高台が外方に踏ん張っている。

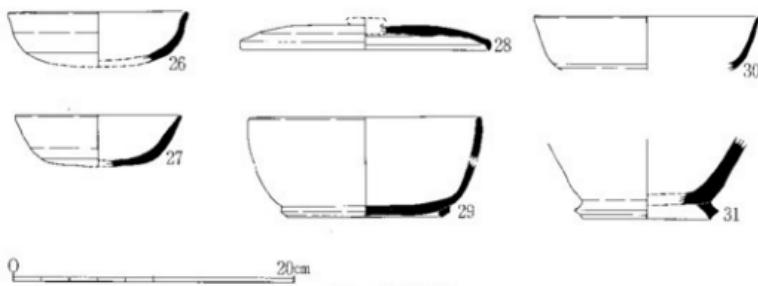


fig.19 出土遺物 1

次に後者に分類される土器は、須恵器・土師器・陶器・磁器と多岐にわたり、量的にも前者よりも圧倒的に多い。

須恵器は、椀(32~40)、小皿(46~47)、捏鉢(41~45)、甕(48)の器種からなる。なかでも椀の出土量が圧倒的に多いが、若干の型式差は認められるものの、ほぼ同時期のものと考えられる。これらの椀の特徴は、糸切りによる底部から緩やかに体部にかけてたちあがり、口縁部端部はわずかに肥厚するものである。捏鉢は、口縁部端部をやや内側斜め方向に擒みあげ、外側に端面を形成するものである。

土師器は、壺・小皿・羽釜が出土している。壺については、底部のみの残存であるが、形態的に須恵器より古い傾向をもつものである。

陶器・磁器としては、白磁碗・青磁皿・瀬戸美濃焼が出土しているが、いずれも小片での出土である。

5. 小 結

今回の宅原遺跡の発掘調査では、小規模な掘立柱建物跡に伴い、奈良時代～平安時代にわたる遺物が出土した。従前の調査成果からすると、特に目新しい成果が上がったわけではないが、宅原遺跡豊浦地区の遺跡の広がりが予想されていたよりもさらに南へ延びることが明らかにできた点を評価できよう。しかし、宅原遺跡の性格を特定するという命題については手掛かりを得ることはできなかった。

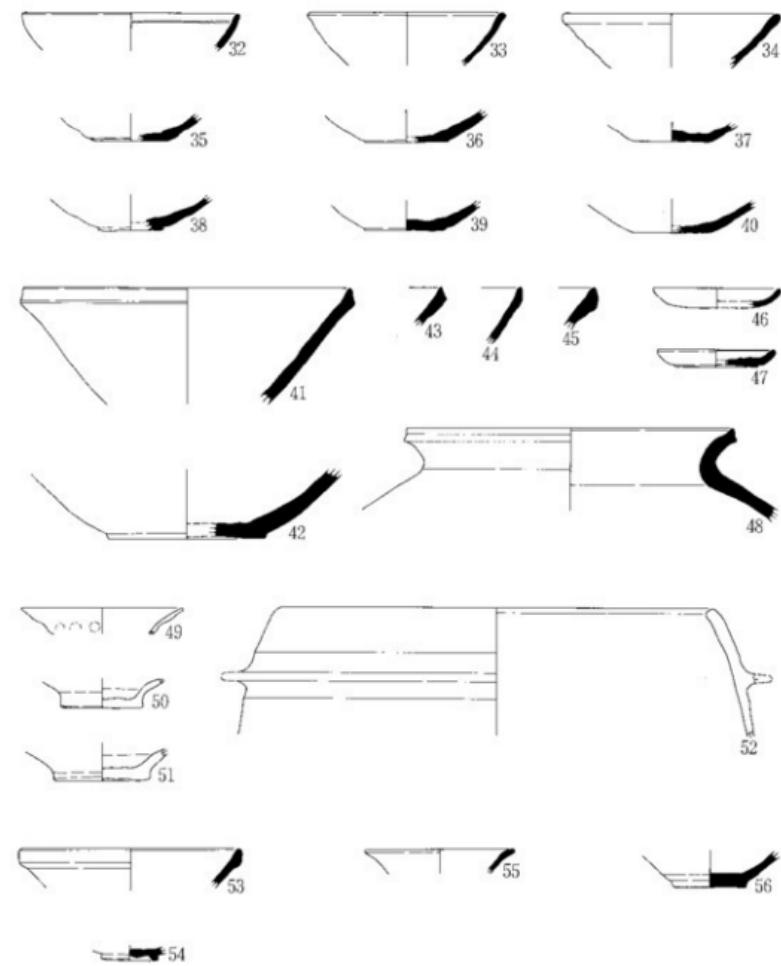


fig.20 出土遺物2

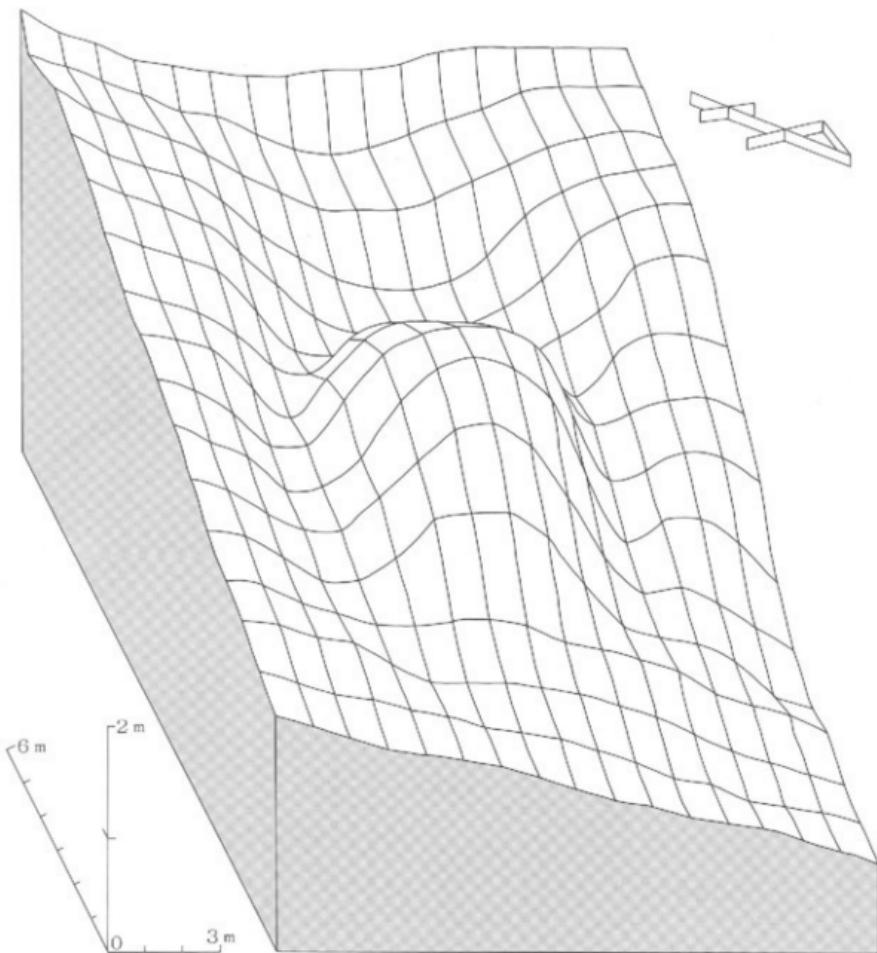


fig.21 龍谷古墳 ブロックダイヤグラム

V 考 察

1. 籠谷古墳築造過程の復元

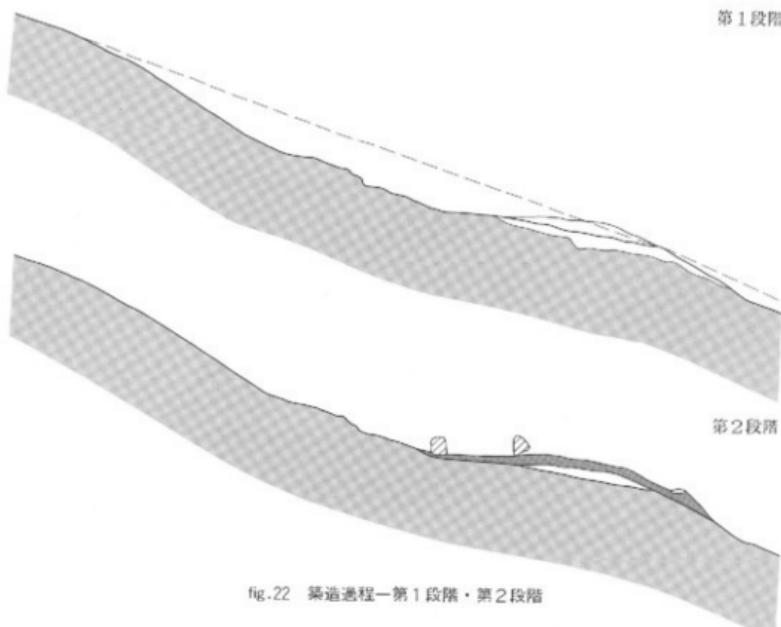
調査の最後に実施した墳丘の断割り調査の結果、墳丘の構築過程をある程度復元できることが明らかとなった。そこで、当古墳の築造過程の復元をおこない、その結果をもとに、若干の検討をおこなってみたい。

(1) 墳丘築造過程の復元

墳丘の構築は以下の4段階に分けることができる。

第1段階 墳丘築造地点の造成

墳丘を構築する予定箇所の上方斜面を若干カットし、その際に生じた土を予定箇所の谷側に



盛土し、平坦地を造成する。また、予定箇所下方斜面についても、旧表土層が認められなかつたことから、斜面を成形しているようである。

第2段階 床面の造成・基底石の設置・列石の貼り付け

第1段階の盛土の上に厚さ約10cmの粘質土を貼り付け、床面を造成する。また同時に、床面の谷側延長上の墳丘斜面との変換部に列石を貼り、粘質土の流失を防いでいる。そして、この床面の上に基底石を設置している。これと同時に、山側の基底石の裏側には掘削土を埋め込み、谷側の基底石の裏側には粘質土を貼り付け、各基底石を固定している。

この段階で注目すべき点は、他の当該期の同規模の横穴式石室に認められるような、明確な墓壙ないし溝を掘削し、基底石を設置しているのではないことである。

第3段階 石室の構築

基底石の上に、第2段・第3段～第6段と順次石材を積み上げていく。各段の石材を積むたびに石材の裏側に掘削土を盛りその盛土を覆うように厚さ約15～20cmの粘質土を貼り付け、盛土の流失を防いでいる。これと同時に、墳丘表面に貼石をおこない、粘質土自体の流失も防ぐ

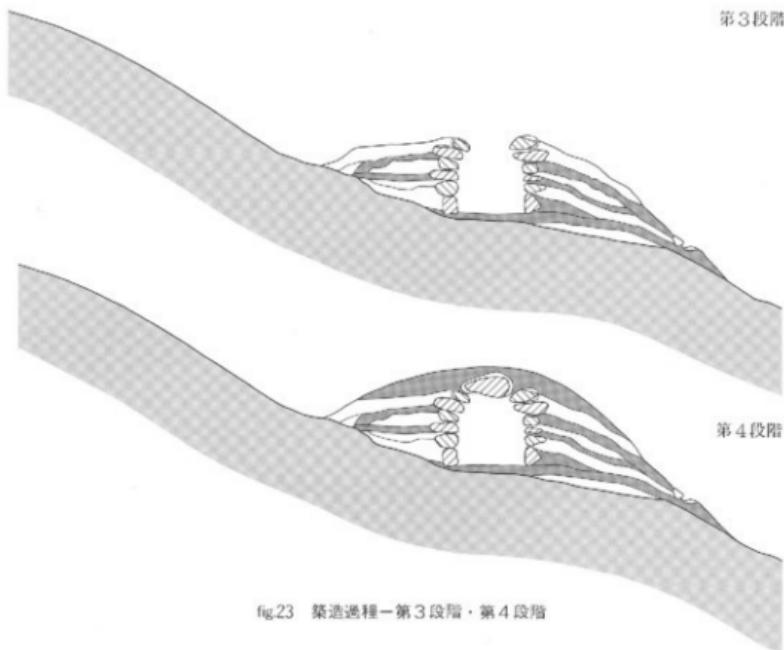


fig.23 墓造過程—第3段階・第4段階

意図が認められる。

このように石室の構築に際して、裏込として石を用いず、全て盛土で行っていることが注目される。

第4段階 天井石の設置

第6段目の石を積み上げた後、天井石をその上にのせ、その後に粘質土を覆い、墳丘を完成させる。天井石を検出していく際、天井石の間に粘質土が充填されていたことから、天井石と第6段目の石材とのすき間をこの粘質土で充填していたものと考えられる。

なお、第3段階の盛土にあたっては、斜面上方を掘削しその土を充てていたものと考えられる。したがって、墳丘上方斜面のカット部および周溝は、第1段階においては完成時に近いものではなく、斜面上方の斜面のカット及び盛土を繰り返すことによって徐々に形成されていったものと考えられる。

以上のように、当古墳の墳丘の構築方法を復元してみたが、以下の2つの特徴を指摘することができる。一つは明確な掘り方（墓壙）を伴わないことである。第2は、盛土と粘質土による補強を繰り返すいわゆる版築に近い方法により墳丘を構築していることである。

(2)古墳築造過程の復元からみた籠谷古墳の位置付け

前節において籠谷古墳の築造過程の復元を試みてきたが、2つの点において他の一般の古墳と異なることが明らかとなった。

なお、当古墳のような版築的技法によって盛土された周辺の古墳としては、7世紀後半と考えられている宝塚市の中山莊闕古墳においても一部確認されている¹。ただし、基本的には断ち割り調査および平面調査をおこなっていないため、墓壙との関係は明らかではない。

さらには、奈良県の岩屋山古墳をはじめとしたいくつかの古墳において、明確な版築技法が確認されている。そして、岩屋山古墳例をもとに、一瀬氏は、版築技法の初現を7世紀第2四半期ごろと考えられている²。籠谷古墳については、版築技法とまでは明言できるかどうかについては、多少の問題点を含んでいる。しかし、歳内における古墳への版築技法の導入とほぼ時期を同じくしてこのような技法がなされていることについては、ある程度の評価をすべきものと考えられる。

ところでこの2点については、当古墳においては、互いに密接に関連するものである。つまり、地山まで掘り込むような墓壙を掘削しないことは石室の構築において、強固な基盤を伴わないことを意味する。したがってこの欠点を補うために、石材を積む度に盛土で裏込をしその盛土を粘質土で固定することによって、石室自体の崩壊を防ごうとしたものと考えられる。

このため、版築的技法を用いての墳丘の構築については、構築技術の先進性を看守することができるが、造成技術の未熟さに伴うものであることから、全面的に評価することはできない。

このような未熟さについては、付近で採集できる河原石をそのまま用いているという、石室構築方法の未熟さとも合致するものである。

以上のことから、当古墳の被葬者は、旧有馬郡全体を支配したというほど有力な首長ではなかったと考えられる。

- 注1. 直宮憲一・古川久雄『中山莊園古墳 発掘調査報告書』宝塚市文化財調査報告書第19集 宝塚市教育委員会 1985年
2. 一瀬和夫『終末期古墳の墳丘』『網干善教先生華甲記念 考古學論集』網干善教先生華甲記念会編 1988年

2. 北摂地域の後・終末期古墳

発掘調査の結果、篠谷古墳は7世紀前半に位置づけられるいわゆる終末期の横穴式石室墳であることが明らかとなった。北摂地域は兵庫県下では終末期古墳が濃密に分布する地域として著名であるが、この古墳の発見は当地域の古墳時代後・終末期を考える上でどのように位置付けることができるのだろうか。北摂地域の後・終末期古墳の研究の現状を概観しながら考えてみたい。

研究の現状

北摂地域では、数多くの古墳が残されているが、現在までのところ前・中期に位置づけられる古墳はほとんど知られておらず、ほとんどすべてが後・終末期の古墳であるといつても過言ではない。この特徴的な古墳の有り方から、栗山伸司、井守徳男両氏は当地方の古墳時代の特質について論じている。

栗山伸司氏は、古墳の存在が希薄な当地に6世紀以降急激に古墳が営まれていくことから、律令体制確立期にかけて諸勢力が進出し、開発が進められていったと考えた。特に、木棺直葬墳は東播磨地方の影響をうけて成立した在地性の強い古墳であり、横穴式石室の採用を文献にみえる諸氏族の移入と考えて、当地域の開発過程を説明した¹。

また井守徳男氏は、三田盆地周辺の古墳について詳細に分析した結果、四・五世紀においては後進的な様相をみせる当地域が、大和政権にとって日本海への重要な交通路となるに至って諸勢力が進出したことを、金銅製冠、特殊偏壺、石棚などの特徴的な遺物・遺構の考察を通して示している²。

北摂地域における後期古墳

当地域の後期古墳で最も古い古墳群は盆地北部の内神古墳群、宮脇古墳群と南部の下田中古墳群とで、木棺直葬墳からなる5世紀末から6世紀前半のものである。これら低平な墳丘を持つ群集墳は、著名な小野市焼山古墳群など東播磨地方を中心に盛んに築かれており、当方もそれと同質の文化圏にあったことがわかる。

この地に横穴式石室が登場するのは6世紀の後半になってからであるが、先の木棺直葬墳とはその分布に偏りがある。特にその差が顕著なのは、武庫川左岸には横穴式石室が採用されて後に群集墳というかたちで古墳群が営まれるのに対し、武庫川右岸では前代からの伝統的な埋葬法である木棺直葬墳が引き続き造営され、横穴式石室墳はほとんど認められない点である。この相違を造営集団の差異とする説が有力である。特に、右岸の貴志・奈良山・西山古墳群は吉士（紀氏）の営んだ古墳群と考えられている³。

このほか、根拠は薄いが、後の大神郷にあたる三輪地域は三輪氏の入植地と考えられているし、日下部は日下部氏の、八多は秦氏の一族が住み着いた土地とされている。

- 木棺直葬墳
- 横穴式石室墳
- 前方後円墳
- ◆ 後末期古墳

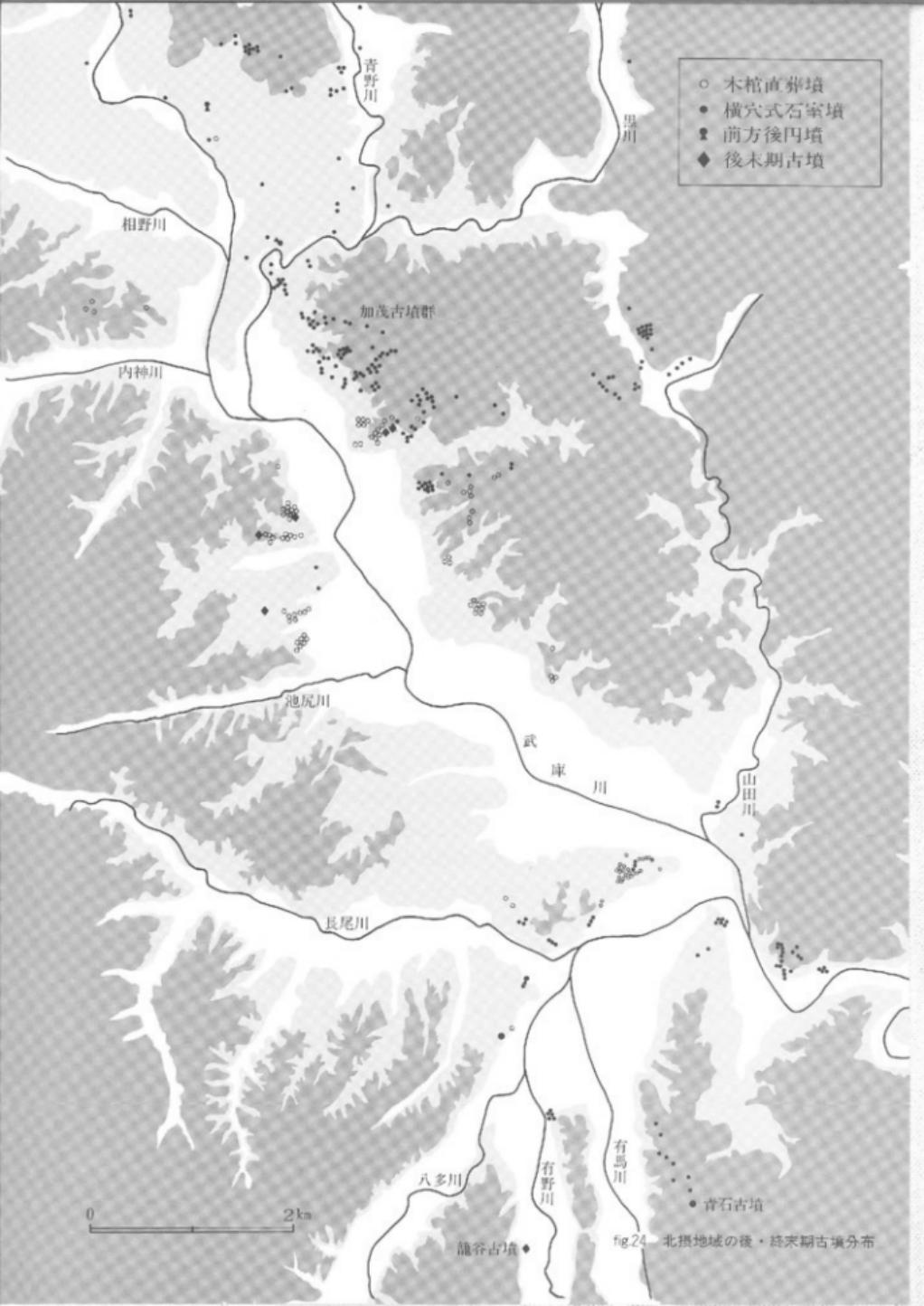


fig.24 北摺地域の後・終末期古墳分布

これらの説は古墳の分布からみて裏付けられるのだろうか。

fig.24に北摂地域の後・終末期古墳の分布を示してみた⁴。この図を見ると、木棺直葬墳と横穴式石室墳および終末期古墳の分布の傾向が特徴的に現れている。先にふれたように、武庫川右岸での木棺直葬墳の優位性は明らかである。しかし、武庫川左岸で横穴式石室墳が主体となっているかというと、かならずしもそうではない。むしろ、木棺直葬墳が主体であったところに、加茂古墳群を中心とした横穴式石室墳が異様なまでに集中して築かれているのである。加茂周辺の武庫川左岸を基盤とした勢力のみではたしてこれだけの古墳群が築けたであろうか。これとは反対に、旧有馬郡の中心地と考えられる三輪地域周辺には古墳は皆無の状態である。この地の開発が遅れていたわけではないことは、弥生時代後期～古墳時代前期の大集落である川除・藤の木遺跡の発見⁵により明らかである。また、加茂古墳群は、個々の古墳の規模、全体の密集度など傑出したものであり、盆地中央部の三輪地域をも含めた、最も勢力をもった集団の墓域であったと考えたい。

石棚を持つ古墳

この地域の後期古墳を特徴付けるものに、石棚を持つ横穴式石室墳がある。石棚を持つ古墳は和歌山県岩橋千塚古墳群や北部九州、徳島県西部の吉野川流域にはまとまって造営されているが、これらの地域を除くと、残りの大部分は畿内北辺部に集中している。

北摂地域ではこれまでに、神戸市尼崎学園4号墳⁶、三田市加茂36号墳(竹内古墳)⁷、三田市東仲古墳⁸の3例が報告されている。

これらの石棚は、その用途については不確かな点が多いが、構築技法上ではほとんど共通している。それは、通常石室奥壁の中程に取りつき、玄門部の天井石とほぼ同じ工程で積み上げられる点である。したがって玄室入口近くの側壁に棚の取りつく東仲古墳の例については通称「石棚」には分類するべきではないと考える。

周辺の石棚を持つ古墳の例は、丹波地方では、氷上郡山南町野田古墳群⁹、多紀郡篠山町岩井山3号墳¹⁰、京都府龜岡市小金駒76・77号墳、同市鹿谷2号墳、同市押田16号墳¹¹、丹後地方では、京都府中郡大宮町新戸1号墳¹²、播磨地方では赤穂市木虎谷2号墳、同鳳張古墳¹³、加西市剣坂古墳、加古川市志方大塚古墳¹⁴がある。以上の11例の分布をみると、特定の地域に集中するというよりも、むしろまんべんなく広範囲に分布する傾向が認められる。また、前方後円墳である押田16号墳と新戸1号墳はもちろんのこと、各古墳はそれぞれの地域では古墳群内で最大規模か、最も中心的な位置を占めている。したがって、石棚を持つ古墳の被葬者はその所属する集団のなかでも有力な者と考えられ、近畿周辺に存在する石棚については、畿内の政権により特にゆるされたものの構築できた感すらする。

終末期の古墳

三田盆地周辺は、7世紀以降のいわゆる終末期古墳の濃密に分布する地域として知られてい

る。これまでに知られている5基の古墳はそれぞれにその様相を異にしているが、基本的には次の三つに分類できよう。

その一つは盆地南部の西宮市青石古墳と神戸市北神ニュータウン内20号地点古墳のような最終末の横穴式石室である。

青石古墳¹⁵は、花崗岩の割石を使用した無袖式の横穴式石室を持つ、7世紀の初頭の古墳である。その形態からは北神ニュータウン内20号地点古墳に先行するものと考えられる。

北神ニュータウン内20号地点古墳¹⁶は、石室全長6.6m、幅1.2mの無袖式の横穴式石室を持つ古墳で、埴丘の前面に6個の列石を有している。石室内からの出土遺物はほとんどなかったが、周溝から出土した須恵器から築造時期は7世紀前半と考えられている。

これらの古墳と籠谷古墳とを比較すると、石室の構築方法に違いはあるものの、単独墳であることと、横穴式石室の形態を強く残しながらも单葬墓であるという点で共通している。

二つめは、青竜寺裏山1号墳¹⁷のように、横穴式石室系統の切石積みの横口式石槨の古墳である。

青竜寺裏山1号墳は、小型の切石積みの竪穴式あるいは横穴式の石室を持つ。この古墳を最も特徴付けるのは、石室内部に使用された磚である。出土状態からは、石室の床か棺台として使用されたものと推定されている。

三つめは、青竜寺裏山2号墳・西山7号墳・奈良山12号墳・奈カリ与古墳¹⁸のように板石を使用した横口式石槨系の古墳である。これらの古墳は、いずれも7世紀の前半代の年代が与えられている。

これらの三つのタイプの終末期古墳は、すべて7世紀の前半代にその年代が考えられているが、その形態からみて、1→2→3の順にその推移が考えられよう。籠谷古墳は、このうちの第1のタイプに分類でき、したがって7世紀の前半でも古い部類に属するものとかんがえられよう。

籠谷古墳被葬者の出自

さて、終末期の古墳の分布状況からみると、各古墳は群集墳中にあり、それぞれ以前の古墳の系譜上におくことが可能であろう。こうした点からみると唯一単独で存在する籠谷古墳は特殊な存在である。これを、この地の首長層がようやくこの時期になって台頭してきたと考えることができよう。また、これとは逆に、籠谷古墳がたんなる二郎地域の首長墳ではなく、日下部古墳群の系譜上における古墳で、その墓域をこの地においたという可能性も指摘しておきたい。

いずれにせよ、後の郷単位程度で終末期の古墳が分布している事実からすると、これら終末期の古墳は、律令期の里長・郷長に移行していく在地有力者の墓と考えるのがいまのところ妥当であり、籠谷古墳の被葬者もこうした在地有力者であると考えておきたい。

- 注1. 栗山伸司 1975 「北摂における古代勢力の性格－有馬郡内の動向を中心として－」
『古代研究』6
2. 井守徳男 1986「畿内周縁部における古墳の展開と終末－兵庫県三田盆地における群集墳と終末期古墳の関連を例として－」『歴史における政治と民衆』
3. 注1・2文献
4. 三田市教育委員会1989『三田市遺跡分布地図』をもとに作成した。
5. 1987年に兵庫県教育委員会が発掘調査。
6. 「新修神戸市史」1自然考古編 1989
7. 注2・4文献
8. 注1文献
9. 注2文献
10. 多紀郡教育事務組合教育委員会1974『峰山・多紀町の古墳』
11. 野田川町教育委員会1985『高浪古墳発掘調査概報』
12. 大宮町教育委員会1979『裏塙遺跡発掘調査概報』
13. 『赤穂市史』第1巻 1981
14. 栗山一夫1934・1935「播磨加古川流域に築造されたる古墳及び遺物調査報告」
『人類学雑誌』49-8,50-2
15. 西宮市教育委員会1974『青石古墳発掘調査報告書』
16. 注6文献
17. 注1・2文献

VII ま　と　め

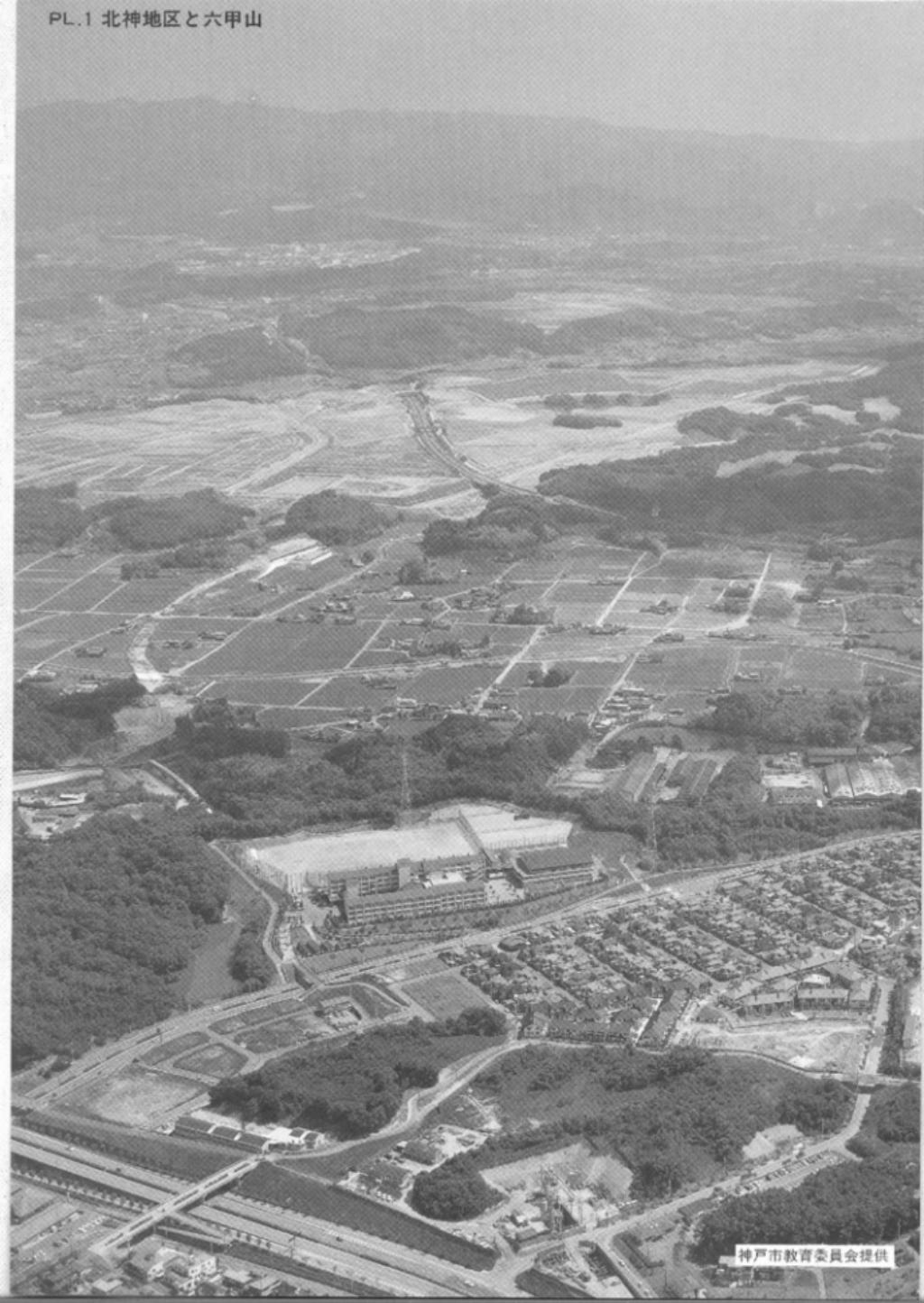
最後に、籠谷古墳と宅原遺跡の調査結果をまとめておきたい。

1. 篠谷古墳について

- ①当古墳は今回の調査が実施される以前は、全く周知されていなかったものであるが古墳であることが明らかとなった。
- ②当古墳は、有野川を中心とする谷底平野を望む丘陵斜面中腹に立地する単独墳である。
- ③当古墳の主体部は無袖式の横穴式石室で、埋葬は1回のみであったと推定される。
- ④石室は、付近の有野川からもたらされると推定される河原石を積みあげて構築されている。また、石室は地山を掘削するような明確な墓壙内に築かれたものではなく、盛土の上に直接積みあげられている。そしてこの2点が、当古墳を最も特徴付ける要素と指摘できる。
- ⑤石室内外をふくめての出土遺物は、埋葬用の木棺に用いられた鉄釘と、須恵器3個体に限られる。この須恵器の特徴から、当古墳の築造年代は7世紀前半と考えられる。

2. 宅原遺跡について

- ①今回調査をおこなった地点は、宅原遺跡のなかでも豊浦地区にあたり、当該地区のなかでも最も高所に位置する。
- ②遺構としては、溝・土壤と掘立柱建物に伴うものと考えられる柱穴をいくつか検出した。調査範囲が狭いため、柱穴については建物を復元することはできなかった。また、各遺構自体の残存状況も良好とはいえず、極めて浅いものであった。
- ③遺物は、いずれも包含層からの出土で、大きく奈良時代から平安時代にかけて、平安時代末から鎌倉時代にかけて、の2時期に分類できる。どの遺物も小片で、当遺跡を特徴づけるものは認められなかった。





PL.3 龍谷古墳遠景



PL.4 調査前



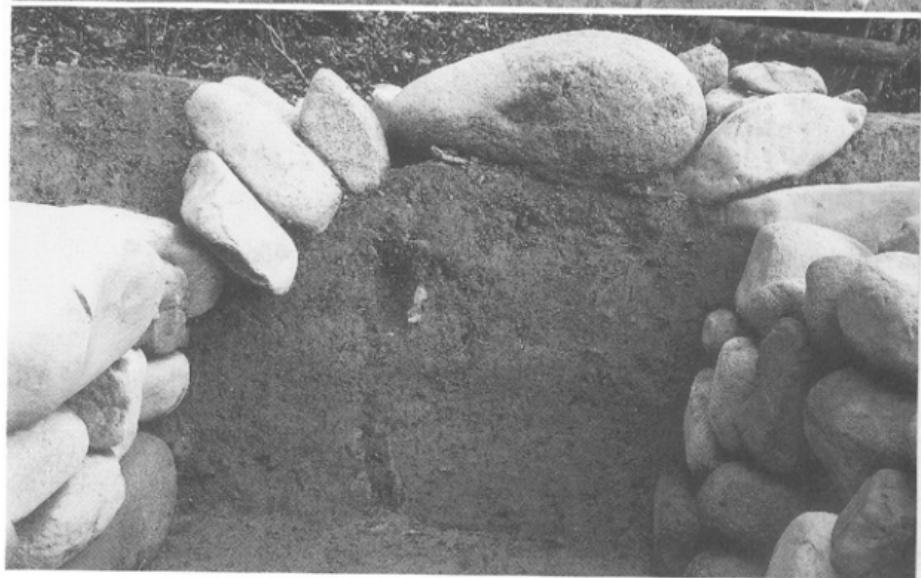
PL. 5 表土除去後



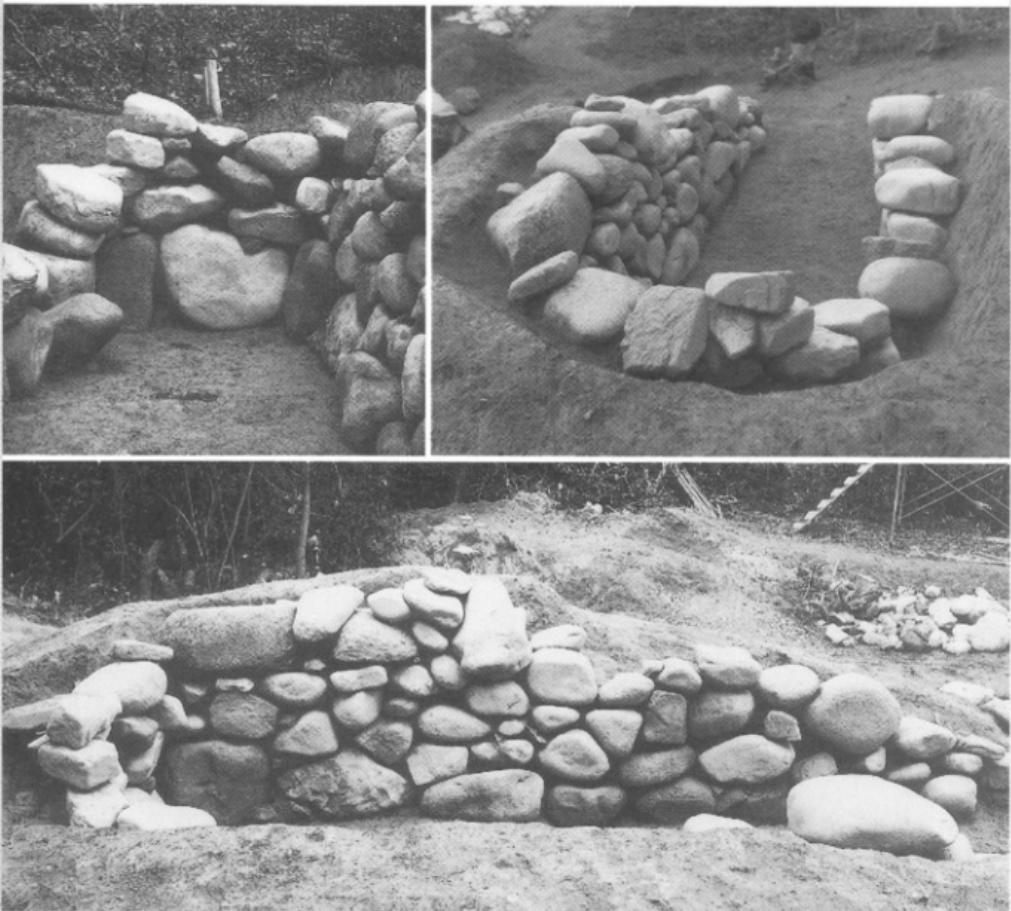
PL. 6 横穴式石室検出状態



PL. 7 石室全景と石室埋土断面

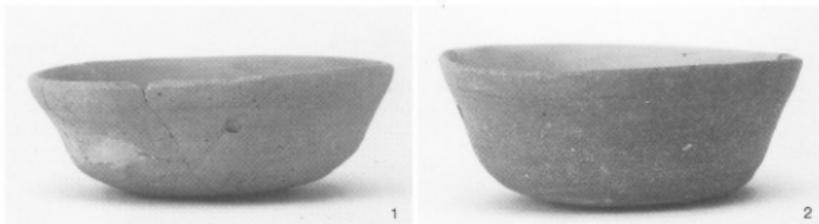


PL. 8 石室奥・側壁



PL.9 墳丘断面

This black and white photograph captures a cross-section of a large, rounded mound, likely an archaeological site. The mound's surface is textured and shows signs of erosion or excavation. At the very top center of the mound sits a small, circular stone structure, possibly a capstone or a marker. To the left of this structure, there is a rectangular depression or a set of steps leading up to the main peak. The background is filled with dense, dark foliage, which provides a strong contrast to the lighter, sandy-colored earth of the mound.

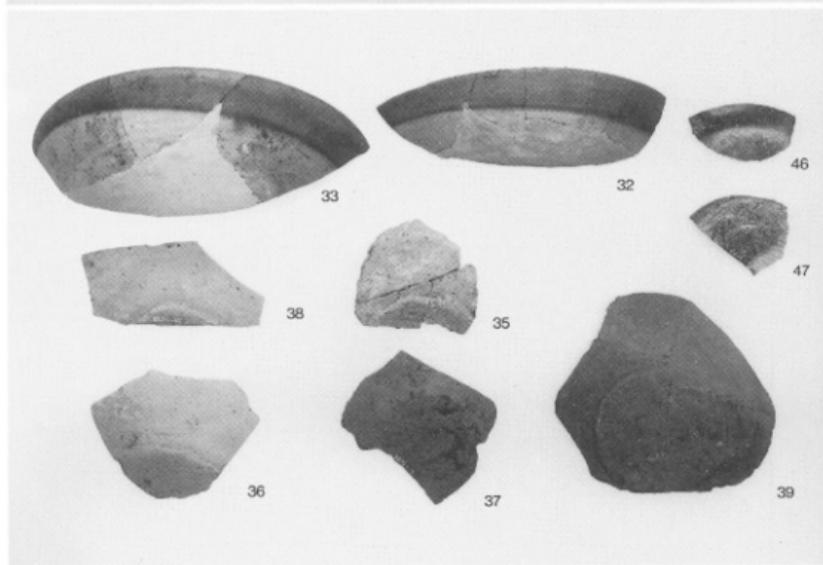
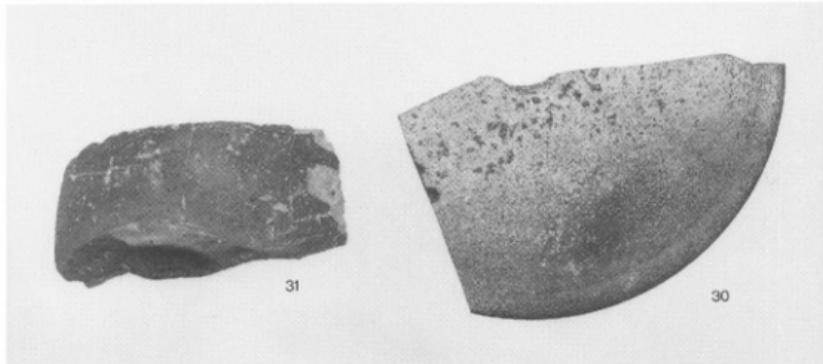
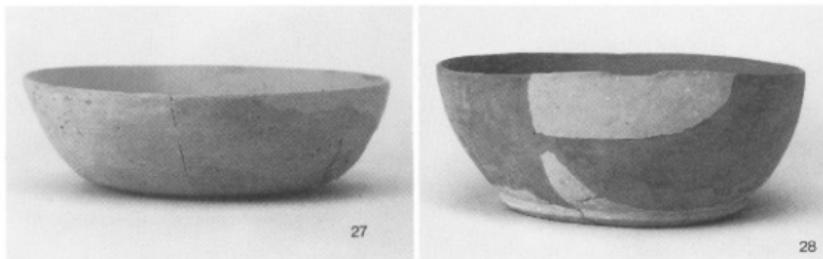


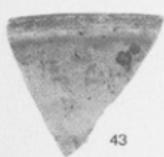


PL. 12 調査地点遠景と土層断面

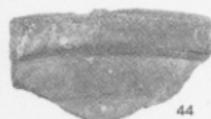








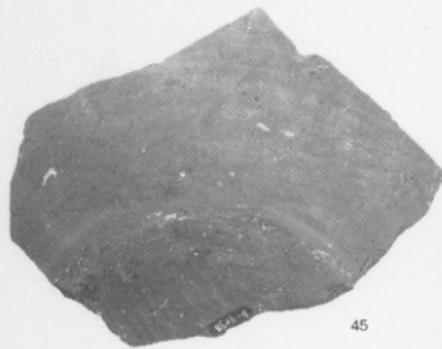
43



44



41



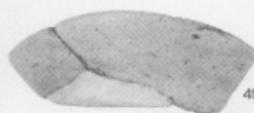
45



42



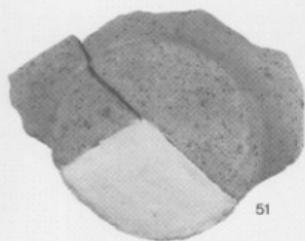
48



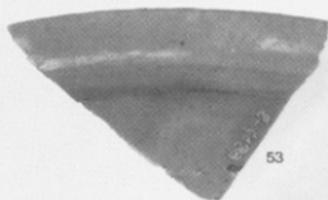
49



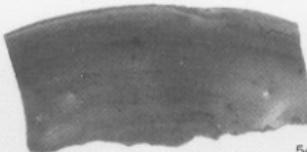
52



51



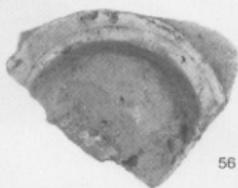
53



54



55



56

兵庫県文化財調査報告 第71集

神戸市北区

籠谷古墳・宅原遺跡

—中国自動車道改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成2年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発行 兵庫県教育委員会
印刷 船場印刷株式会社